

『万葉集』に見られる大正・昭和初期の日本人論

名古屋大学ヨーロッパセンター特任講師

フォンリュブケ留奈子

(VON LUEBKE Runako)

『万葉集』は明治時代に国民的歌集としての文学的位置を確立して以来、大正・昭和の近代化に沿って変容を遂げつつ人口に膾炙してきた。近年、万葉集は再び日本文学・文化の原点として注目を浴びている。2009年の万葉集1250周年記念事業、2010年の平城遷都1300年記念事業では、様々な形式で万葉集の文化財としての価値が強調された。これらの行事と並行して、JR 東海は「ココロ・ニ・マド・ヲ 万葉集」という公式ウェブサイトを発信し、万葉歌を日本国内の風光明媚な映像に載せて定期的に紹介している。また、NHK は2008年以降、「日めくり万葉集」という番組で万葉歌の新しい解釈を週日提供している。いずれの行事・メディアにおいても万葉集は、古代日本人の生活と感情の宝庫、即ち「日本人の心のふるさと」と概念化されている。

本稿では、万葉集に対する現代の通念について、大正時代から昭和初期にかけて創り上げられた表象に照準をあてつつ検討してみたい。万葉集は帝国主義下で日本人の民族性の淵源として理想化され、やがて軍国主義支持の具として濫用された。その歪曲された解釈は戦後の民主主義によって刷新され、現在『万葉集』は自由闊達で浪漫的なイメージと共に謳われるに至っている。この経緯を鑑みると、現代の万葉集の基本的概念は、大正・戦前に喧伝された言説に回帰したと見なし得る。また、この万葉集に纏わる通念の変遷は、長年に亘り人気を博し続ける「日本人論（日本人および日本文化についての議論）」という観念と密接に関連していることも指摘したい。

平成の万葉“ブーム”と「日本人・日本文化論」

万葉集は近代以降、日本社会において度重ねて「ブーム」を博している古典歌集である。近年、万葉集は再び出版物・テレビ・インターネット等の媒体において頻繁に取り上げられ、あたかも平成の「万葉ブーム」の様相を呈している。いずれのメディアでも、万葉集は概して「古代日本人の生活と感情の宝庫」と表現される。これは万葉集の古代性および編纂と成り立ちに関わる時間的・空間的な広がり大きさに拠る。万葉集の編纂は8世紀、その歌集を構成する歌が詠まれた舞台は、九州から本州の北端に及ぶ。現在も、万葉歌とそれに纏わ

る史実および伝説は、学校教育や地域の学習センターを通して市民の間に語り継がれている。また、万葉集は各地方の文化遺産に彩りを添える好個の材料でもあり、現代の地域振興政策にも寄与している。

平成時代の日本における万葉ブームは、2000年代後半に催された二つの公的事業および関連行事でピークを迎えた。ひとつは、2009年に行われた万葉集1250周年記念事業である。これは万葉集編纂から1250年になる節目の年を記念し、著名な万葉研究者を中心とする「万葉のこころを未来へ」という実行委員会が運営した一連の行事である。同実行委員会は諸都市で開催された万葉集に関するシンポジウムや講演を始め、一般公募で集められた短歌1000首を「平成万葉集」として編纂した。もうひとつは、翌2010年に奈良県で行われた平城遷都1300年記念事業である。ここでも万葉集は奈良県の文化財の象徴として中心的な役割を果たした。この記念事業の期間中、奈良県の諸会場に万葉集に関連のある全国各地の地方自治体から代表者や有志達が集った。そこには著名な学者や芸術家なども招かれ、万葉集と日本文化についての講演、万葉歌を題材にした演歌やオペラなど、多彩なイベントが繰り広げられた。

これらの公的行事と並行して、JR 東海は「ココロ・ニ・マド・ヲ 万葉集」という公式ウェブサイトを発信し、万葉歌を日本国内の風光明媚な映像に載せて定期的に紹介していた。JR 東海地域の主要な駅などには「ロックやポップもいいけど、日本人なら万葉集でしょ。」という興味深いキャッチコピーが書かれたポスターが掲示されていた¹。

万葉集に掛けて、「日本人」たる人々に「日本文化・伝統」へ回帰することを歴然と促す文言 — この「日本人なら万葉集でしょ」という現代の「万葉集論」はどこから来たのか。あるいは、万葉集に通じていることが日本人としての条件であるかのような「日本人論」的な言説はいつ頃から定着したのか。本稿では、これらに対する一つの見解の鍵を、日本文学史において重要な功績を残した学者および歌人達の言説とその背景にあった明治・大正期の社会状況に照らして探りたい。

万葉集受容の軌跡：表象の確立と変化

万葉集が一般の読者を獲得したのは、近代以降である。江戸時代まで万葉集はごく一部の研究者や歌人の間で読みつがられていただけであった。現在、一般的に想起される万葉集の概念は、江戸時代の国学派によって規定された。とりわけ国学者・賀茂真淵が万葉集の歌の特

¹ このポスターは少なくとも筆者が名古屋駅を利用した2011年8月まで構内の数か所に掲示されていた。

長とした「ますらおぶり」「なおきこころ」「まこと」という概念は、後世の万葉集の表象化に大きな影響を及ぼしてきた。

明治近代化における万葉集の社会的受容の変遷については、品田悦一の『万葉集の発明』（2001）に詳しい。品田は、万葉集は明治以降に日本人の国民性・アイデンティティの定義を支える「文化装置」として「発明された」と議論している。明治維新後の日本のエリート達は自国を近代国家として文化的にするためには、ドイツにおけるゲーテ、イギリスのシェークスピアに匹敵するような日本独自の古典文学の確立が必要と考えたという。そこで時のエリート達が日本の国民文学にふさわしいと目を付けたのが万葉集であった。日本の「国文学」創設に寄与した三上参次と高津楯三郎はその共著『日本文学史1』（1890）の中で、「上は万乗の貴きより、下匹夫（ひっふ）に至るまで皆、歌を詠まざるなし」と万葉集を紹介した。即ちこれが、万葉集は「天皇から庶民まで」の歌から成る歌集であり、その歌風は「素朴であり、雄渾且つ真率な日本人の心情」を表しているという、現在まで国語教育で語り継がれている解釈の淵源となった。更に品田は、この万葉集に関する概念を広く普及させる過程において、アララギ派を中心とする歌人たちの影響力が大きかったことを指摘する。例えば、明治後期に活躍した作家であり歌人の伊藤左千夫は、万葉集は日本が誇る文化遺産であると力説した。

万葉集は単に吾国の古代文学とのみ見るべからず、正に吾日本民族の趣味的思想の根源なれば、凡そ人間として必ず其祖先を知らざるべからざるが如く、日本人たるものは、如何なる種類の人と雖も、必ず万葉集を知らざるべからざるなり、……一国の人民として自国の文学を知らず、自国思想の根源を知らざるは、其国民たるの資格なきものなり。〔伊藤左千夫（1904）、引用：品田悦一（1997：166）〕

大正期に入ると、左千夫の弟子である島木赤彦が、万葉集に記録されている歌の世界を日本の民族性の理想的な在り方とした。

万葉集は民族的の歌であります。日本民族全体が赤裸になって膝を交えて、お互に人間としての共通した感情を有りのままに歌っております。上は天皇から下は潮汲む海女、乞食までが皆さようであります。天皇が菜を摘む少女に恋歌をよみかけていらせられる。また身分の卑

しい少女が身分の高い人に赤裸々な恋歌を送っている。このように、
凡ての階級のものが、この時代の現実の問題に正面から向き合って、
一様に緊張した心を以て歌っているというのが第一の特徴であります。

[島木赤彦(1954)、引用：品田悦一(2001:49-50)]

明治以来、万葉集に関する注釈書や解説書が次々と出版されたことも、万葉集が一般に普及した大きな要因であった。内藤明は、数ある注釈書の中から、窪田空穂が果たした役割に注目している。歌人であり国文学者であった窪田空穂は、万人に受け入れられるような内容の万葉集注釈書を出版した先駆的な存在であった(内藤、1997)。

万葉集の歌は何時よんで見てもおもしろい、繰返して読む度に、前には味へなかつた味を覚える・・・自分のここに試みようとするのは、万葉集を一つの歌集として専ら興味の方から見、自分の好きな歌について、その好きな所を言はうとするのである。万葉集を見やうと思ひながら、億劫に感じて手を付けられなくている人には、或は此の集の大体を窺ふ上に於いて、多少の便利があるかと思ふ。[窪田空穂(1907)、引用：内藤明(1997:111)]

このようにして万葉集は、日本民族“集団”としての心を映す歌集として、且つ日本人“個人”の心を満たす歌の数々の集大成として、一般に広く認識されていくようになったのである。これらの言説の背景に、帝国主義および大正デモクラシーの自由主義的思想の勃興があったことは重要である。

大正時代から昭和の戦前までの日本は、日露戦争勝利と資本主義経済の発展によって大國意識に沸き立っていた。当時の国家教育目標は、より強い軍備拡張と資本主義経済発展を担う国民を養成することであった。同時に、資本家と労働者、都市と農村の格差の広がりも深刻化していた。民主主義思想の浸透によって、各地で様々な社会運動が高まっており、教育界では学生運動も起こっていた。この事態に対し、政府は本格的な思想問題対策をこうじた。まず1923年に「国民道徳」と「国家思想」の涵養を掲げた『国民精神作興に関する詔書』が公布され、1937年には国体の尊厳を説き天皇への忠誠を誓うことを教育の基本と

する『国体の本義』が刊行された。これらと並行して、教育政策においては「愛郷心」を養うことも謳われていた（山田、貝塚 2005）。

万葉集はこれらの国家大義を体現するにふさわしい知的財産であった。加えて、明治時代に創出された万葉集に対する「素朴・雄渾・真率」の歌風という基本概念は、当時の政府が描く大国を支える日本国民の理想像を表していた。この時期、下記の引用に明白に示されているように、万葉歌と日本国民性のつながりを強調した言説は全国津々浦々の学校教育で喧伝された。

萬葉の調べといふものは、萬葉独特のものであつて、雄渾な時代意識に生きた萬葉人の力強い意志の力の現はれといふ事ができる。・・・この根本的の意力が、昭和聖代に生を享けた吾々日本国民のたくましくも亦新しい息吹そのものなのであるまいか。（平田、1939）

戦時下の教育で、万葉集における「日本人の資質」は軍国主義に基づいた国家のプロパガンダに濫用されることになる。軍は万葉集におさめられている古代兵士の歌を濫用し、「忠君愛国」や「敬神思想」を奉り挙げ、戦争に対する自己犠牲を美化した。その格好な道具として使われたのは、以下の歌である。

「今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出立つわれは（巻20、4373）」

万葉集は当時、出征兵が携帯する書物の代表であった。とりわけ岩波文庫から1927年に出版された『新訓万葉集』（佐佐木信綱編）は、携帯に便利な大きさと手軽に入手できる廉価のため、多数の読者を獲得していた（平山、1986:152）。『万葉集』は、『古事記』と『日本書紀』と並んで、軍によって認められていた推薦書であった。軍にとっては、とりわけその歌集中に収められている防人歌は勇敢さを讃える「ますらおぶり」の粹であり、大義のために自己犠牲を厭わない精神を鼓舞するに有益であると捉えられていた。しかしそのような歌は4000首以上ある万葉歌の中のごく一部に過ぎない。兵士達が万葉集を愛読していた真の理由は勇ましい歌の外にあったと考えられる。生還できぬ立場にある若い学徒達にとって、万葉集に描かれた恋愛や家族愛や故郷への慕情をかき立てる歌は、この世で最後の

儂いオアシスのようなものであったに違いない。大戦が激化するにつれて、無数の若い兵士達の命は、戦場で無惨に散っていった。戦中戦後、戦死兵の遺品や捕虜兵の所持品の中から、山ほどの万葉集文庫本が回収されたという。²

敗戦後日本は、アメリカ占領の下で戦後処理と復興の道を辿り始めた。一夜にして長く続いた日本帝国主義から、それまで敵国と忌み嫌っていた外国の主導による全く新しい体制が始まったのであった³。一方、学者達の間でも戦争加担への責任を厳しく批判する風潮が興った。戦時中の軍制の下で、学者や歌人など文筆業に携わる者達の中には、戦争賛美ととれる歌や文章を発表した者も多かったのである。

戦時中万葉は「ますらを」の文学だとされ、大いにミリタリズムに利用された、と同時にこちらからも進んで大いにミリタリズムに奉仕した形であるが、これは・・・日本ミリタリズムを精神的に色濃く性格づけている農本主義が農村的文学としての万葉に殆ど肉体的に共感し、そこに自己の道德感情の依るべき民族的系譜の涙泉を発見したことでそれはあったし、また万葉を愛し、万葉を研究する歌人や学者も、自己の農村性において、殆どミリタリズムを疑ふすべを知らなかったに外ならない。(西郷、1958)

民主化政策の下で、万葉集のイメージも再び大きく塗り替えられることになる。一般の言説において新たに強調あるいは称賛されるようになった概念は、「家族愛」や「郷土愛」である。これらの通念は、戦後65年以上が過ぎた今日も変わらず、万葉集が語られる時に必ず

² これを裏付ける逸話として、ドナルド・キーン博士（日本文学）が雑誌『日めくり万葉集 vol.6』（中村、2009:72）のインタビューの中で述懐しているが挙げられる。彼は太平洋戦争中に海軍に所属しており、戦死・捕虜兵の所有物を整理する担当であった。彼はその整理作業を通して、兵士達の多くが『万葉集』の文庫本を携帯していた事に驚いたという。

³ 敗戦後の日本に渦巻いていた一般の人々の喪失感と混乱の様子については、小熊英二（1995）が詳しく描写している。

とっていいほど言及される。むしろ、近年の学校教育で再評価されている。例えば、東京の世田谷区の小中学校で教えられている「日本語」という授業のなかでは、「豊かな人間性」と「大らかな心」そして「生き生きとした生活感」を教える教材として、万葉集の歌が紹介されている。同時に、「郷土愛」を子ども達に植え付ける目的で、地域に関連する万葉集を教える事が推進されている。

この万葉集の平和的且つ庶民的なイメージを支えるのは、学校教育だけではない。NHKは2008年以降2012年3月23日まで、「日めくり万葉集」という番組で、平日の朝5分間の番組で、万葉歌の新しい解釈を提供していた。この「日めくり万葉集」というテレビ番組について、公式ウェブサイトではこのように紹介していた。

「日めくり万葉集」という雑誌は、・・・様々な分野で活躍する100人ほどの方が、万葉の歌に共感し、ご自身の歩んでこられた人生に照らしながら万葉人の生活や感情を見出しています。その魅力的な光彩は、過去の日本人のところが非常に豊かであったことを照らしだし、現代の私たちに誇りを与えることでしょう。・・・私たちの足元を見つめ、こころを豊かに生きるひとときを手にしていただければと思います。

(藤原茂樹 「NHK 日めくり万葉集 vol.1」2008年12月24日 朝日新聞朝刊)

この番組では、著名な国文学者および万葉学者勢を始めとし、その他の学問分野からの専門家、芸術家、料理研究家など多様な背景を持つ人々を「選者」としている。とりわけ、若い有名人を起用し万葉歌を鑑賞させることで、中高年だけでなく若年層に対して万葉集の魅力を訴えようとしている。テレビで放映された番組の内容は雑誌とDVDとして販売されている。

特筆すべきは、観光業がこのNHKテレビ番組に関連して、万葉歌が詠まれた土地や史跡を辿る旅行を企画したことである。例えば、近畿日本ツーリスト会社は「日めくり万葉集の

旅」という特別限定旅行パッケージを提供していた⁴。この旅行企画の宣伝の文言には、万葉集が呼び起こすイメージをふんだんに盛り込まれている。

時を越えて、私たちのところに古代の人々の息吹を伝え、新たな力を与えてくれる万葉集の旅。その万葉集を育んだ風土を訪ねる『日めぐり万葉集』の旅です。日本各地にある万葉の故地を訪ねて、歌の生まれた場所に立って、万葉びとのまなざしで山を眺め、川のせせらぎを聞く。万葉歌の生まれた日本の豊かな自然・風土に触れる「歌枕」の旅、万葉のころを訪ねる旅を、ご一緒いたしましょう。・・・日本のころ、万葉のころを今一度見つめてみてはいかがでしょうか。

この宣伝には今日の日本において一般的に想起される万葉集の通念が明示されている。即ち「万葉のころ」は「日本のころ」であり、その「ころ」を育むのは日本の古き良き美しい「風土」であるという認識である。

昨今、日本政府は新しい教育において日本の伝統文化に対する理解と尊敬を深めることを強化することを打ち出してきた。具体的な例として、「美しい国」づくりを目指した安倍晋三前首相⁵は、教育を通じて子どもたちに「愛国心」を涵養する必要性があると主張した(高橋、2004:11-16)。この文化主義は2008年に改正された文部科学省の新学習指導要領における正式な教育課題に反映されている。戦後日本の教育の理念は、「平和」と「民主主義」を基盤として刷新され発展してきた。この状況下で、学校教育に用いられる万葉歌は概して、温和で浪漫的な田園詩風という印象で括られている。今日の学校教育課程では、戦前

⁴ これは、NHK番組「日めぐり万葉集」に関わる著名な万葉集学者とともに万葉歌に縁にある土地を巡る特別ツアーとして企画された。2010年の4月21日から7月15日の期間中の指定日に、奈良、滋賀、愛知、愛媛、香川、和歌山の6コースが提供された。

⁵ 安倍晋三は首相に就任する直前の2006年7月に自らの政治信条を綴った『美しい国へ』(2006)という本を出版している。「美しい国」は、彼の政権スローガンにも取り入れられており、自らの政権を「美しい国づくり内閣」と命名していた。

戦中の偏狭なナショナリズムと反して、政治的な含みを一切感じさせる事のない中立的で無害な歌とその鑑賞のみをとりあげている。この万葉鑑賞に、かつての「勇敢さ」の象徴としての「ますらおぶり」への礼賛は見られない。代わって現在の万葉集の基本概念で重要視されているのは、家族を始めとする社会に対する「愛情」、さらに帰属する故郷および国に対する「慕情」である。

万葉集表象の今：変遷の中に基調をなす不変的価値

日本の近現代の歴史において、万葉集の表象は社会と教育および政策の狙いを如実に反映してきた。この流れの中で戦後の万葉集の大衆化をみると、それは文芸における民主化、即ち一般の読者が古典詩歌を自由に選び解釈することを許されるようになった過程であるといえるだろう。戦後時代の万葉集人気は、教育界を率いる国家エリートによるトップダウン式の圧力の仕掛けによる部分もある。しかしそれ以上に、一般民衆の市民社会によるボトムアップの欲求の勢いに支えられている面が強いことも事実である。

最も記憶に新しい近年の万葉ブームには、出版業界、放送メディア、視聴覚教材開発業界、民間会社、学者、文筆家、芸術家、旅行業界、そして地方自治体という、多様な人々と業界が関わり相互に作用し合っていた。それにより万葉集は種々の形式をとって出版され、研究され、民間に享受されてきた。例えば、若い世代に対して、万葉集は漫画やエッセイ、映像や音楽などに形を変えてわかりやすく現代風に解釈されるようになっている。かなりの万葉愛好家が存在する中高年層に対しては、一般教養用の学術書籍はもちろん、既存の生活・旅行・趣味雑誌等で「万葉集を旅する」などと銘打った特集号が周期的に刊行されている。また万葉集に関連のある地域では、生涯学習のプログラムなどで万葉集の歌や歴史をわかりやすく鑑賞する場が多くある。それらはしばしば地元の郷土研究者や万葉愛好家で運営されている。有志達は夜間や休日集って万葉歌や歴史を学び、折に触れ全国各地に存在する万葉歌碑を訪ねる旅に出かけて、古代へ思いを馳せることを楽しんでいる。この根強い人気に対し、万葉ゆかりの地ツアーなるものを定期的に提供する旅行会社も存在する。万葉愛好家達にとって、万葉集をわかりやすく興味深く語ってくれる研究者はカリスマ的な人気を誇る。そのような学者達は地方の学校やイベントなどで一般市民に対して開かれる出張講義で、あるいは雑誌やインターネットのメディアを通して、万葉集の魅力を伝え続けている。

このように、現代における万葉集の通念と受容の様式は、近現代以降の歴史の中で、最も多様化しているといえる。しかし、この変化の一方で、万葉集の表象には確固たる不変性が存在する。それは大正戦前の歌人および学者達が唱えたように万葉集と「民族性（＝日本

人)」、延いてはそれを育む「土地(=日本)」との深い関連性である。確かに、大正戦前期に確立された万葉観は、当時の帝国主義の熱気を帯びた社会の高揚感を反映するものであった。しかしながら、その言説は、戦後現代の日本が目指してきた平和・民主主義国の理念追求にも十分に適合するのである。

大正戦前期の歌人や学者達によって構築された万葉言説は極端な賛美に溢れていて、現代の読者にとっては違和感が大きいかもしれない。それにも関わらず、現代の万葉言説にしばしばその基調を汲み取ることができるのは、当時の万葉言説が、現代人が夢見る古き佳き時代と理想郷を彷彿させるからだと考えられる。現在の万葉集の表象は、大正戦前期に濫用された「日本民族」などという政治がかった硬い表現ではなく、「日本人の心のふるさと」という詩的な柔かい言葉で彩られている。いずれにせよ両方の根底にあるのは、理想的な「日本人」および「日本の国」という概念への強いこだわりである。この概念を核として、今後とも万葉集の表象は日本人論と並行して受け継がれ、展開され続けることであろう。

参考文献

- 安倍晋三（2006）『美しい国へ』、東京、文藝春秋。
- 平田紀水（1939）「万葉と現代」、『瑞垣』、滋賀、彦根高等商業学校刊。
- 平山城児（1986）「万葉集研究の軌跡と未来：明治以後の万葉集研究についての私的感慨」、『国文学解釈と鑑賞 5 1』、東京、至文堂。
- 伊藤左千夫（1904）『左千夫全集』、東京、岩波書店。
- 窪田空穂（1907）「万葉集新釈」、『文章世界 2』、東京、博文館。
- 三上参次、高津鋏三郎（1890）『日本文学史 1』、東京、金港堂。
- 内藤明（1997）「窪田空穂における万葉集研究の出発：「万葉新釈」から『万葉集選』へ」、『早稲田人文自然科学研究 5 2』、東京、早稲田大学社会科学学会。
- 中村勝行編（2009）『NHK 日めくり万葉集 vol.6』、東京、講談社。
- 小熊英二（1995）『単一民族神話の起源』、東京、新曜社。
- 西郷信綱（1958）『万葉私記』、東京、東京大学出版会。
- 島木赤彦（1954）『歌道小見』、東京、岩波文庫。
- 品田悦一（1997）「国民文学としての万葉像はいかに形成されたか」、『国文学解釈と鑑賞 6 2』、東京、至文堂。
- 品田悦一（2001）『万葉集の発明：国民国家と文化装置としての古典』、東京、新曜社。
- 高橋哲哉（2004）『教育と国家』、東京、講談社現代新書。
- 山田恵吾、貝塚茂樹 [共著]（2005）『教育史からみる学校・教師・人間像』、千葉、梓出版社。